

俳句講演会「季語で深まる俳句の魅力」～正岡子規から俳句甲子園まで

橋本直

引用した作品の一覧

双蝶は蝶とあるいじつにわおの	鳴乃奈菜
障子つめて四方の紅葉を感じての	星野立子
花めれば西行の目とおもふべし	角川源義
願はくは花の下にて春死なむその1月の望月のこころ	西行
ちよよの事の事も出ず桜かな	松尾芭蕉
はかなくは過れりこころを数ならむは花に物思ひを春を経てける	式子内親王
我病て桜に思ふ事多し	正岡子規
古池や蛙飛びこぼ水の音	芭蕉
かはし鳴く神奈備川に影見えてもか咲くらむ山吹の花	厚見王
蛙鳴く井出の山吹散りけり花の盛りにあはましもものを	詠み人知らず
山吹の花色衣主も誰問へど答はずいぢなごころ	素性法師
ほろ／＼と山吹散るや瀧の音	全
山吹や宇治の焙炉の匂ふ時	全
山吹は咲かで蛙は水の底	鬼貫
山吹や井出を流るる鮑魚	無村
山吹の咲くや武蔵の玉川に	子規
川波に山吹映り澄まるとし	高濱虚子
山吹や磯がら／＼と啼く蛙	全
青木に影うつるものあはれ	全
手を入れてみたき青木紅葉かな	大石悦子
青木の心を知らば園原の道にあらやなく惑ひぬるかな	光源氏
数ならぬ大屋に井出の影をよすは花に物思ひを春を経てける	青木
歩行ならば杖しき坂を落馬かな	芭蕉
ちよよの事の事も出ず桜かな	才麿
軽口にまかせしなはちよよの影	井原西鶴
氷の上の魚木に登る童かな	鷹羽狩行
大言海閑しや菜の花蝶と化す	菅原蘭也
鷹鳩に化すちよよの君は修道士	渡邊千枝子
飛騨風のむか／＼のん	小林一茶

鷹草虫となりて渋谷の暗渠かな	田口葉於
蛤となれぬ雀の庭に来し	柏原眠雨
切り分ける西瓜たちちち笑ひ出す	嶋田麻紀
もろ手入れ西瓜提灯ともしけり	大橋櫻坡子
ふなびつら鮫なご雪にかき下す	加藤椒邨
湯のうしろの鱈食へる音死者の家	坪内稔典
風吹けば泣くこゝろ鱈の鱧を干す	平松三平
猫鮫と蝶鮫とある至近距離	上野遊馬
本の上へつたて遠く海に鮫	小澤實
冬枯や熊祭る子の蝦夷錦	正岡子規
校庭を熊が眺めてゐたりちち	相生垣瓜人
みちのくは底知れぬ国大熊(おやぢ)生く	佐藤鬼房
しつ冷や十字架の墓むすこころ	榛谷美枝子
神々の声のこゝろも玻璃の華	源鬼彦
話し出す前の呼吸に書きた	鈴木牛後
流水や宗谷の門波荒れやます	山口誓子
川を見るバナナの皮は手より落ち	虚子
バナナ・コロスを花鳥と呼べるとし思へ	筑紫盤井
洗ひ髪く／＼と細き面輪かな	玉兎
童貞聖くくマ無原罪の御孕りの祝詞と歳時記に	正木のこ子
ひそ天下に去来程の小やまを参りけり	虚子
田舎まことに試みるゝ麻地酒	井月
共に泳ぐ幻の鱈僕のもの	二橋敏雄
ロンリのおでんが好きの舞ひたい	神野紗希
ヒロイヒロイマサバクタンと浴蔵庫に書かれ	関克史
夏草や兵どもが夢の跡	芭蕉
降の雪を明治は遠くはなれ	中村草田男
小鳥來の三徳年の地層かな	山口徳翁
ひのきのおの小屋を壊せばみなあそび	安井浩司
灯を消せば部屋無辺なり夜の雪	小川軽舟
夕焼や千年後には鳥の国	青本袖紀
去年今年貴く棒の如きもの	虚子

パンツ脱ぐ遠き少年泳へのか	山口誓子
泳ぐなり水没都市の青空を	堀田孝何
田一枚ついで立ち去る柳かな	芭蕉
露地裏を夜汽車と思ひ金魚かな	攝津幸彦
留まらぬ／＼と誰も／＼と五徳年終したる／＼	高橋新吾
千年の留留に瀑布を掛けておく	夏石番矢
草いざれ鉄材錆びて積まれけり	杉田久女
草いざれ吸って私は鬼の裔	阿部なつみ
春光や瑠璃いろなる桃のやう	久保より江
春光や飯にかけたる塩見えす	小野あらた
雲騰の雷鳥の嶺かがやきぬ	河野南畦
うちのなかかほんの塩気かも雷鳴	小川楓子

季語にまつて様々な用語について

・「季語」とは・・・子規の没後に世間で一般化した呼称。

他)「折節の書物」(「僻連抄」)(南北朝時代の連歌論書)、「季、季の詞、季詞、四季の詞、季の題、四季の題」など

※この「季」は子規以前の時代の呼称はなれず「季題」

・本意→季語の指し示す対象のもの本来めぐるべきもの

(和歌・連歌の世界で形成された伝統的な詠みのパターン)

・本情→蕉風俳諧における「本意」

・縦題→和歌以来の本意をまつ季語

・横題→近世になって季語の扱いになった語

・新横題→明治以降の新季語をまつ場合がある。

歳時記の季語の数

俳諧初学抄(俳諧式田書)	徳貞1641年刊	566
はな心草(俳諧式田書)	野々口平圃1647年刊	646
山之井(俳諧季語)	北村季吟1648年刊	1032
滑稽雑談(季語注釈書)	四時亭其謙1713年刊	1836
俳諧歳時記(季語分類辞典)	滝沢馬琴1803年刊	2601

俳諧歳時記草案（監修背監増補改訂）1851年刊 3424
（以下、宇田久「季の問題」（昭和12年刊）所収資料をもとに作成）

俳諧歳時記（1933〔昭和八年〕改造社） 40000
図説大歳時記（1964、65〔昭和39、40〕角川書店）50001～

もっと知りたい方のための参考文献案内

久保田淳・馬場あき子編「歌じよば歌枕大事典」（角川書店）

→ 歌語の本意の流むぎむのくゝを知るのに便利。

平井照敏編「新歳時記」（河出書房新社／河出文庫）

→ 季語じよじ「本意」を解説。ただし編者独自の解釈あり。

復本一郎著「俳句実践講義」（岩波現代文庫）

→ 入門書だが、巻末に縦題・横題の別を付した主要季語一覧付。

同「芭蕉歳時記 野題季語がく味むくべん」（講談社選書メチエ）

→ 縦（野）題季語の〇の解説。巻末に掲載資料別の縦題季語一覧

西村睦子著「正月のない歳時記―虚子が作った近代季語の枠組み」（本阿弥書店）

（本阿弥書店）

→ 虚子編「新歳時記」を中心とした近代季語の展開を検証した力作。

前田霧人編『新歳時記通覧』（2008年創刊）

→ 個人誌で緻密な季語の研究を継続している。

その他、著名な俳人による季語じよまつわる書物は漢書新書でも多数

片山由美子「季語を知る」（角川選書）、権未知子「季語の底力」

（生活人新書）、坪内稔典「季語集」（岩波新書）、宮坂静生「季語の

誕生」（岩波新書）など

「1100語集」

立春（しゅんじゆ）雨水（すいすい）啓蟄（けいちけい）

春分（しゆんぶん）清明（せいめい）穀雨（こくう）

立夏（りつか）小満（しょうまん）芒種（ぼうしゆ）

夏至（じゆ）小暑（しょうしゆ）大暑（だいしゆ）

立秋（りゅうきゅう）処暑（こしよ）白露（はるく）

秋分（しゅうぶん）寒露（かんろ）霜降（しやうかう）

立冬（りゅうりゅう）小雪（しょうせつ）大雪（だいせつ）
冬至（とうじ）小寒（しょうかん）大寒（だいかん）

「1100語」参考文献

「俳諧「1100語」の発祥秘話」俳人・榛谷美枝子さんの「俳句を詠

む」<https://sukidesu-sapporo.com/2019/06/19/hangei-mieko/>

「南方季語」資料

拙稿「キタキ1100語」2015年10月31日更新（一部改題あり）

「1100語」<http://sokab19main.jp/sukuru/17031.html>

高濱虚子じよ「川を見るバナナの皮は手の落ち」じよじ句がある。変

な句だ。そのせいから、時々批評の狙いに向けられる。虚子が本当にバナ

ナを皮へ落じしたかどうかなんて話もあるが、それはわいておき、かつて

虚子は、季題「バナナ」を自分の編集した歳時記から落じしている。

虚子編「新歳時記」は、昭和九年十一月初版。昭和十五年四月に改訂

版がでている。わたしの手元には、改訂の第三十版（昭和十八年）と

らじよその後の昭和二十六年増訂の第六十一版（平成五年）があるのじよ引

用はじよわりによる。その改訂に際して、虚子は「熱帯の気候・動植物・人

事季のじよじよ1100語集に属するものじよじよ諷刺し来たものを増補」（改

訂版の序文）した。その「熱帯季題」は以下の三十五語じよ、七月の最後

に載せしめる。

熱帯、赤道、馬來正月、朝霞、木蔭、オアシス、貿易風、スコール

赤道祭、嫁遣、象、水牛、鰐、鱷、極楽鳥、熱帯魚、火焰樹、無憂草、

鳳凰樹、宝冠木、仏桑花、ドラゴン、マンゴスチン、マンゴー、パパ

イヤ、龍眼、バナナ、パイナップル、椰子、檳榔樹、護国樹、榕樹、ク

ロマン、月下美人、フーゲンバリア

じよじよは昭和十一年の渡欧にあたり、虚子が執筆した「熱帯季題小論」

上巻（初出「東京日日新聞」昭和十一年四月十四・十五日）に記している

熱帯季題群をほぼ踏襲したものであり、それじよその小論の補遺（初出「ホ

トトギス」昭和十一年九月。「定本高濱虚子全集」第十一巻所収の記事

「掘る」に記している。虚子は「そんな風に地方へくへ歳時記が出来たら俳

句の統一がはじよかじよたい。じよじよじよは本十の歳時記を準備し、大体は

其じよ準備し、唯熱帯地方には特別の取除けがあるじよじよたじよ、じよじよ
か自由で作れるじよじよななかもこれだ。」と述べ、これは例外扱いじよ
南方じよ句作する人々の便宜のためじよじよじよ熱帯の季題を歳時記に収める
じよじよじよたじよじよのだ。

じよじよじよ、坊城俊樹の記事じよれば、バナナは既に初版に収められて

じよじよじよじよじよ（※注）熱帯季語を収めるじよじよじよ、改訂版じよ

じよじよじよらわたたもじよ思わたり。先の虚子の句は、昭和九年十一月の

作なので初版には収められてじよないが、改訂版には収められてじよ。解

説じよは「バナナ即ち甘蔗（「みぢかじよ」じよじよ・・・引用者）じよ、産地

は多じよ熱帯の国じよある。又余の著頭に、大長葉の間から果々じよ垂れ下じよ

た群果は蓋じよ見事なものであらじよ。内地にも大量じよ輸入され、滋養じよ

なるじよ、夏多じよ食べられむ。」とある。例句は虚子句の他に、

各じよじよ遠き故郷をバナナじよ

駝峰を道果とねるバナナじよ

バナナ實じよ程の馬來語覺えけじよ

の三句。先の坊城の記事じよれば、白じよの句は初版には「台湾所見」と

前書があったとありじよある。じよまらじよれば、小船じよ客船にバナナを売るじよ

くるとじよじよ「外地」の風景だ。そして虚子は、敗戦後の歳時記「増訂」に

あだじよじよ「熱帯季題の項をけじよじよじよじよじよのじよである。じよの戦

後処理じよあるじよ。その坊城の記事じよは「南洋季題はかならずじよも一般化

せず、そのまじよ消えじよじよじよたもじよある。」と書いてじよるけれど、状況

はもじよじよじよのじよじよ。まじよじよ、高度成長期とバブル期を経て、

バナナの他、熱帯のものも随分身近になり、現行の歳時記類に収められ

てじよる語もあるけれど、かじよじよのじよじよじよがあったじよは覚えて

おきたじよと思つ。そしてなけれど、人の都府で短期間に拾われ拾らわ

た「花鳥」たる熱帯季題群や、一緒に削られてじよじよじよバナナがななじよ

も気の毒じよはななじよ。筑紫警井の句じよ、

バナナ・バナナを花鳥と聞くと思へく

とじよじよがあるが、これは初版を後じよじよじよじよであるじよ。戦後の増訂版

じよは、「バナナはであるが、バナナは載じよじよじよななじよだかな。

（注）坊城俊樹「高濱虚子のー〇〇句を讀む」第一ー回

<http://www.wizbooks.co.jp/kosh71.html>